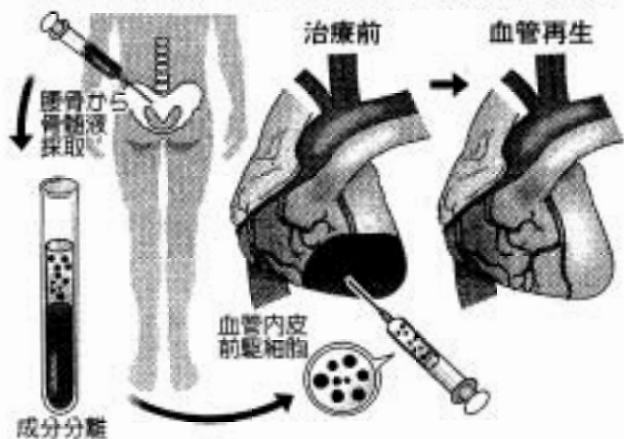




骨髓細胞で心疾患治療

県内
初 信大来月から臨床試験

信大医学部（松本市）の天野純・心臓血管外科教授、池田宇一・大学院医学研究科教授らのチームは、四月から、心臓の血管が狭くなった（詰まって発症する狭心症や心筋梗塞（こうそく）といった「虚血性心疾患」の患者の心臓に、患者自身の骨髓細胞を移植して血管を再生する、再生医療の臨床試験を始める。県内では初めて。従来の治療法では完治しなかった患者でも心臓の働きを回復する新しい治療法として注目される。

治療は心臓血管外科、治療は、血管にカテーテル、大学院医学研究科、輸血（細い管）を入れて狭部、循環器内科、循環器科など部分を広げる治療再生医学講座（寄付講座）や、別の部分から血管のチームが行う。を取ってきて移植するパ現在、虚血性心疾患のバイパス手術が行われてい

るが、重症だったり血管が細い場合はこれらの治療法が適応できず、ほかの有効な手立てはほとんどなかった。

治療の対象は、こうした従来の治療法が適応できない重症の虚血性心疾患の患者。まず、患者の腰骨から骨髓六〇ccを取り出し、その中から「血管内皮前駆細胞」だけを抽出して、心臓の血管が狭くなった（詰まった部分）に注射する。

血管内皮前駆細胞は人間の血液中を常に流れており、傷んだ血管を修復したり、血管を新たに作るなどの働きをしている。この再生能力によって、注射から数週間後に血管が再生し、心臓の働きが回復するといふ。

池田教授らは、これま

での研究で、人為的に心筋梗塞を起こした「カニクイサル」で同じ実験をしたところ、移植した部分

移植で血管が再生 重症者に効果期待

「患者自身の骨髓細胞を便つたため拒絶反応の心配はないし、サルを使つた動物実験では副作用もなかった。従来は治療を放したり、心臓の中にあきらめていた患者さんにも新しい治療法を提供できる」と池田教授。治療効果が少ない方法も視野に入れている。

信大チームは昨年、手足の血管が詰まる「閉塞（へいそく）性動脈硬化」という。同種の治療法は、関西大、山口大、九州大などの患者に骨髓細胞を移植と施設で計十例ほど行われているが、血管内皮前駆細胞だけでなく骨髓の他の成分も一緒に移植しているため、同細胞の多い。この治療法を信大の大きな柱にしたい」と話している。

同治療についての問い合わせは信大病院循環器内科外来（☎0263・37・2768）へ。

科学